

昭和の思い出と青春の葛藤。と
ある街の旅館組合で青色申告の
指導をしていた頃

koberyo1

戦後まもなくの昭和の時代である。わたしは当時、外資系の銀行をやめ、K会計事務所で働いていた。そこで気づいたのは、一般の人たちの税金についてあまりに無知なことであった。

というのも収入から経費を差し引いて営業利益を求める。そのあとは税法の出番だ。ではあるが、市井の人たちの考え方はそこから税金をきれいにスルーしてしまうのである。

法律では、儲けのすべてをポケットに入れてはいけない。税金を支払うべきである。だが、経費が税法上、認められないとか、個人のドンブリ勘定が常態化しているとか、はたまた青色申告をすることで逆に儲けを搾りとられてしまうとかの心理が働き、なかなか税にかんする知識が浸透してゆかない。そこで税金にかんする指導が必要になったわけだけでも、これに協力し、税金を納めようとする人たちは実に少なかった。

収入を少なく申告したり、経費を水増しするなどは日常茶飯事である。だから、この時代、青色申告の指導は相当な説得力を要する、いわば「難事業」でもあった。というわけで税金の適正申告の指導のためにK会計事務所から、とある街の旅館組合へと派遣された。

が、しかし、それは想像を超える大変な仕事となった。会計事務所の社長のK先生と、Kさんの同郷のNさんが私の体を心配し、ときおり気づかっでは見舞ってくれるほどだった。

そのころ、事務所には税務署から転職してきたMさんと私、それから高校を卒業し、K先生の茨木の郷里からやってきたYくんがいた。三人はそれぞれキャリアが異なり、一歩いてきた道や見てきた風景、飲んできた水の味が違うということでもあるが、なかなか融和することができない。私としても胸の大病をしたわけだから、自分の体の調子を考えて、この仕事に全力を傾ける気にはどうしてもなれなかった。いずれ、一生の仕事を持ちたいなどと漠然と考えていた。

とある街の旅館組合までの道のりだが、まずは新宿中央線に乗り、お茶の水で総武線にのりかえた。それから浅草駅で下車し、さらに路面電車にゆられ、一路、浅草をめざす。路面電車を降りると、それぞれの旅館組合員をたずねた。

組合長は立派な家に暮らし、リーダーシップのある人だった。なかでも法政大学を卒業した旅館のご主人は理論派で、こちらの方が煙に巻かれて困ったものだ。それからこんな人もあった。

ご主人が映画会社に勤務しており、旅館の経営はどちらでも良い、という組合員の奥さんは熱海の二宮（にのみや）に別荘をもっていた。青色申告に関しては「好きに計らえ」的な身の入らなさ、であった。そのような奥さんだったが、指導に訪れると映画の切符をいつも頂戴した。

旅館組合の「まとめ役」はもちろん、組合長だ。ただ実際は、その下で働く事務員にKさんという五十歳くらいのおばさんが事務局の役割を果たしていた。

Kさんのご主人は警察に努めており、子どもは二人おり、すでに仕事をもつ大人であった。それでも奥さんは朝夕は路面に立ち、新聞の売り子のアルバイトに励んでいた。地元では評判の働き者であり、明るい腰の低い人であった。

そのKさんから食事に誘われたことがある。ご飯を奢ってもらったのだ。

ある日の夕方、仕事から帰る途中だった。Kさんに声をかけられ、「これから食事にでも行こう」と声をかけられたのである。

ふたつ返事で一緒に赴いた先は、ちんまりと古めかしい店だった。数代は続いた店だったろう。繁盛し、有名になった「天婦羅屋」だった。「葵丸進（あおいまるしん）」という浅草でも由緒ある老舗で、店中が天婦羅に匂いでぷんぷんしていた。

注文したのは「かき揚げ丼」だ。客がすわるカウンターは油がすっかり染み込んでいてツルツルになっていた。今にも油がしたたり落ちそうである。

やがて直径15センチほどもある「かき揚げ」がドンブリにのせられ、ご登場と相成った。ドンブリの中の飯が見えないほどの大きさである。あまりにも立派な「かき揚げ丼」でびっくりした。また「かき揚げ丼」にかけられている「つゆ」が濃厚で、これはまたうまい。揚げたての「かき揚げ」をふうふういいながらかぶりついて食べたあの味、今でも忘れられないでいる。